

# 国語

( 解答番号

1

)

30

・

101

)

105

)

## 第1問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

最近になって急にA個性教育ということが強調されるようになって、筆者も参加している第十五、十六期の※中央教育審議会において、個性を重視する教育をいかに行うべきかが極めて重要な課題として論議されている。

このような状況が生じる要因のひとつとして、B欧米諸国の日本人に対する厳しい批判がある。日本人は全体的、平均的に知識レベルを向上させることが上手であるが、特別に創造的な仕事をする人を育てることができない。全体の知的水準の高さを基礎にして、科学技術を発展させ、経済的には一流になったが、そのようなことを可能にした基礎としての科学研究の領域で大きい仕事を何もしていない。端的に言うと、上手な人真似で金を儲けるが、その基になる発明や発見は他人まかせにしているズルイというのである。日本の外交官、近藤誠一は在米大使館が行なったアメリカ人の対日深層心理調査の結果にもとづいて「アメリカ人の中には、予想以上の否定的対日感情が、その心理の底流に流れている」ことを明らかにしている(近藤誠一『歪められる日本イメージ』サイマル出版会、一九九七年)。日本人は「ずる賢く」、「世界を征服しよう」と企んでいる、「気の許せない」人間と思われているという。

つまり、他人のもっているものを上手に取り込んで、ずる賢く立ち回り、やがては世界を征服しようとしている、というイメージをもって日本人を見ている人が多い、ということである。そんなのまったくの誤解と日本人は言うだろうが、それはある程度仕方がない、と言うべきであり、その要因として、日本人の個性のなさということがある。うまく他人の考えを取り入れるのに、「あなたの考

えは」と訊かれると、ほとんどの人が答えない。いつも、あいまいである。これは①ハイゴで何か企んでいるのだと思われてしまう。私自身もそのような誤解を受けることがあって、なるほど思ったが、おそらく、日本の外交官やビジネスマンで外国人と②コウショウする機会をもった人は同様に感じたのに違いない。そこで、日本人の個性を伸ばす教育の重要性がにわかには認識されてきたと思われる。

個性を大切と考える欧米においては、人間の能力差の存在ということは当然と思われている。しかし、この点について日本人は呆れるほどの「平等感」をもっている。十五期の中央教育審議会において、欧米の創造的な学問研究の流れに遅れないようにするひとつの方策として、あちらでは普通のことになっている、小中学校におけるいわゆる「とび級」など、要するに能力に応じて年齢と関係なく進級できる制度を日本に導入することについて論議された。欧米においては、特に優秀な人物は、年齢と関係なく大学や大学院へと進んでいる。そこで、日本においてもと考え、小中学校での「とび級」を見送るとしても、特に優秀な者はせめて大学入学のチャンスを一年くらい早くするという案が提示された。しかし、これに関する一般、あるいは大学の反応はC否定的な方が多かったようだ。

欧米では常識になっていることが、なぜ日本ではできないのだろう。それは、日本人のもつほとんど絶対と言えるほどの「平等感」による③テイコウのためであると思われる。日本ではこのような平等感を盾にとつて、創造的な才能をもった人の「足を引張る」ことが多く、これまでも、優秀な学者が海外に流出することが多いという事実がそれを証明している。これが現代日本の問題なのだ。

ところで、興味深いことに、日本でも戦前はある程度の「とび級」を認めていた。旧制の中学は五年制だったが、四年修了で旧制の高校を受験することができた。つまり、よくできる者は四年修了で高校、大学と進むことができたのである。

あるとき、※鶴岡市の史跡である庄内藩の藩校「致道館」を見

学した。これは一八〇〇年初頭に設立された藩校であるが、その教育方針は徹底した能力主義に貫かれている。『史跡庄内藩校 致道館』（社団法人庄内文化財保存会、一九七一年）によれば、「入学当初以外は年齢による規制はなく、入学後は学力に応じて進級できる仕組み」になっていた。そして※士分以下のものでも秀才については特別入学を許し、身分制度に対しても自由な道をひらいていた。この藩校の教育方針は、現在においても参考になることが他にもあるが、それは①カツアイして、Dここに示された「とび級」の思想について考えてみたい。

致道館において完全な「とび級」が認められていたものには、この館の教育に関する※趣意書ともいうべき※「被仰出書」に次のような文が認められる。つまり、※「天性得手不得手有之者候」とか、※「天性可大者致大成、可小者致小成」などの文が認められる。ここでは、人間に性来にそなわっているものとしての「天性」が重視され、天性が大か小かによって将来が異なるので、指導者はその点を弁<sup>わ</sup>えるべきだと述べられている。

このような考えは、もともと※荻生徂徠<sup>おぎせいざい</sup>の思想に基づくものである。荻生徂徠は※朱子学を学びつつも彼独自の考えを発展させた人である。したがって、おそらく当時の日本中の藩校の教育方針がすべてこのようだったとは思わないが、ともかくこのような思想に基づいて、「とび級」を徳川時代に行なっていた、という事実は注目に値する。

それではこのような考えや制度が存在したのに、戦後に一挙にそれがなくなり、現在においてなぜ一般の人々（※インテリも含めて）が、「とび級」に対してアレルギーと言っているほどの反撥<sup>はんぱつ</sup>を示すのだろうか。それは多くの人々は絶対平等感を「民主主義」の考えとして欧米から輸入したものと考えているからである。ところが、その欧米において「とび級」は普通にあるし、興味深いことに、日本の徳川時代にもあったのだ。これは重要な問題だと思われる。これにはいろいろなことからみ合っているので、簡単には解

明できないとも思うが、私なりに考えたことを述べてみよう。

まず言えることは、欧米において言われる個性と、荻生徂徠の言う天性とは、似てはいるが異なる、ということである。結果的には個人差を認めているが、日本の場合の発想は「天」からはじまっており、人間の持つている天性の差が問題とされるのに対して、欧米では、個人から発想し、個人間の能力差を問題とする。おそらく、ヨーロッパでもはじめは個人の能力を神から与えられたものとして受けとめていただろうが、既に述べたように、だんだんと人間の力が強くなるに従って、個人を中心とする発想に変化していったのだろう。

ところで、日本は欧米の強い②エイキヨウを受けて、「天性」などという非合理と思われることは棄<sup>す</sup>ててしまった。そして、「民主主義」を取り入れるときに「個性」抜きにし、日本人の母性原理と結びつけてしまったので、まったく没個性的な絶対平等感ができあがってしまった。これを①によるものと考えず、②のよう

に思い込んだので、これは余計に日本に強固になったと思われる。人間存在の本質に関わる平等感と、能力差の肯定は区別して考えるべきことである。しかし、これは実際にはなかなか難しい。これを行うためには、次に述べるように、通常の「私」の背後に、何らかのそれを超えるものの存在を認めざるを得ない。ここで、西洋の③ではなく、「天」という存在を認める考え方が、わが国にあったのはまことに有難い。必ずしも借りものによらずに考えることが可能となるからである。

（河合隼雄 『日本文化のゆくえ』 一部改変）

※(文中のことばの意味)

中央教育審議会：… 文部科学省における審議会。

鶴岡市：… 山形県の庄内地方南部の都市。

士分：… 江戸時代の武士階級。

趣意書：… 物事を行う際に、その趣旨や概要を記した書。

被仰出書：… 学問の奨励に関する書。

天性得手不得手有之者候：… 天性において得意な者や不得意の者がいる、という意味。

天性可大者致大成、可小者致小成：… 天性に優れた者は成功し、劣る者は成功しない、という意味。

荻生徂徠：… 江戸時代の思想家。

朱子学：… 中国から伝わった学問の派閥。身分制度や上下関係を重視する傾向がある。

インテリ：… 知識人、知識人階級の意。

問1

線①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

解答番号は裏面の

101

① 「ハイゴ」

② 「コウシヨウ」

③ 「テイコウ」

④ 「カツアイ」

⑤ 「エイキョウ」

問2

線A「個性教育」とありますが、どのような「教育」ですか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

1

① 自分の考えをしっかりと持ち、他人に伝えることができる人物を育てるための教育。

② 全体的に国民の知的水準を向上させ、科学技術を発展させることができる人物を育てるための教育。

③ 国家として経済的に一流となり、その結果科学研究の領域で活躍できる人物を育てるための教育。

④ 外交官やビジネスマンとして、外国人と対等に渡り合える語学力を持った人物を育てるための教育。

問3

線B「欧米諸国の日本人に対する厳しい批判」とありますが、どのような「批判」ですか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

2

① 日本人が科学技術を発展させ、短期間で欧米と並ぶ一流の経済成功を可能にしたことへの批判。

② 日本人が上手に金を儲けることで、世界を征服しようとしていることへの批判。

③ 日本人が知的水準や科学研究の面で成功するも、発明や発見は他人まかせにしていることへの批判。

④ 日本人が他人のものを上手に取りこみながらも、意思を明確にしないことへの批判。

問4 ———線C「否定的な方が多かったようだ」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **3**

- ① 日本人は自分より優秀な人物をねたま足を引つ張るため、優秀な人物は海外に流出しがちだから。
- ② 日本人は公平という価値観を大切にしている、他の人々と異なる特別な存在を認めたくないから。
- ③ 日本人は能力による差を当然としていて、大学などの学問の場においては個人の能力が大切であるから。
- ④ 日本人は小中学校において義務教育を受けており、個人の能力差よりも平等な年齢という観点を重視するから。

問5 ———線D「ここに示された『とび級』の思想」とありますが、どのような「思想」ですか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **4**

- ① 人間には一人ひとりによって能力の差があり、能力の高い者と低い者は区別されるべきであるという思想。
- ② 朱子学の発想に基づき、人間には親子や兄弟などの上下関係を中心とした道徳が不可欠であるという思想。
- ③ 人間は生まれながらに超越的な存在から才能を与えられており、それによって将来が異なるという思想。
- ④ 徳川時代に重視されていた身分制度を否定し、個人の能力や年齢などを重視するという思想。

問6 ———I・IIに入る語として最も適当なものを、次の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号はIが **5**・IIが **6**

- ① 進歩的な外来思想
- ② 日本の伝統的考え
- ③ 自らの創造的研究
- ④ 押しつけられた教育方針

問7 ———IIIに入る語として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **7**

- ① 個性尊重
- ② 能力格差
- ③ 唯一の神
- ④ 法の下の平等

**問8** 本文の内容として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選びなさい。ただし、解答の順序は問いません。

解答番号は 

8
---

 ・ 

9
---

- ① アメリカ人は日本人に対し「ずる賢い」、「世界を征服しよう」と企んでいる」、「気の許せない」などの否定的な感情を抱いているが、それは大きな誤解である。
- ② 欧米人は創造的な学問の研究の流れに遅れないようにするため、個人の能力差を重視し、「とび級」の制度を取り入れている。
- ③ 現在の日本の教育は個人の能力の差を認めにくいものとなっているが、江戸時代の事例はこの教育が伝統的なものではないことを示している。
- ④ 現在において日本で「とび級」が認められないのは、戦後に欧米から輸入した「民主主義」という考え方そのものに根本的な原因がある。
- ⑤ 欧米を模範とした日本は「天性」という考え方を棄ててしまったが、その発想は日本人の母性原理と結びついて現在にもまだ残り続けている。
- ⑥ 人間とはそもそも平等な存在であるが、同時に人間一人ひとりの差異を認めることができるような考え方が、日本社会には求められている。

## 第2問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

楽器店で調律師を目指す見習いである「僕」(外村)。

入社して五ヶ月が過ぎたころ、先輩の柳が担当する顧客の佐倉宅に、初めて同行することになった。その家にはふたごの高校生姉妹がいた。姉の名前は和音、妹は由仁。

ある日、同行した顧客先の調律が終わると、柳は所用(彼女に指輪を渡す)のため直帰することになった。外村は柳の調律道具が詰まった鞆(かばん)を会社の軽自動車に積み、車を走らせた。信号待ちをしているとき、偶然にも由仁と出くわす。話を聞くと、ピアノのラ音が出ないので調律してほしいという依頼だった。外村は、見習い期間中は調律をしてはいけないことになっていたが、由仁の懇願を断ることができず承諾してしまう。

ふたごの家に訪問し、ピアノの蓋(ふた)を開けて確認すると、鍵盤と音を出す部分とのつながりが固くなっていただけだった。簡単な作業で、ラの音が出るようになった。その後、姉妹のすばらしい演奏を聴き、外村は心打たれ感動する。

「それでは、僕はこれで」

帰ろうとすると、ふたごに引き留められた。

「乾燥のせいでしょうか、いつもより少し全体的に音程が上がっているような気がするんです」

「微妙に気持ち悪い感じがします」

口々に言い出した。確かに少し気になるところはあった。でも、おかしいと言うほどではない。触らなくてだいじょうぶだと思っ

た。A 触るとしても、僕じゃない。柳さんだ。

それなのに、魔が差したとしか言いようがない。今の※連弾で、完全に胸が熱くなってしまうていた。できるんじゃないか。B 微妙なずれだけを直せばいい。ふたごがもつと気持ちよくピアノを弾けるように。

ピアノは一台ずつ違う。わかっているつもりで、わかっているなかつたのだ。初めて触るピアノ。乾燥しすぎている部屋。暑くないのに汗をかいた。緊張しているつもりもないのに指が震えた。わずかに回せばいいだけのピンを回しすぎてしまう。戻そうとして指が滑る。いつもなら難なくこなせる作業に途轍(とてつ)もない時間がかかった。少しだけ、少しだけ、と思いつながら、望まぬほうに音がずれていくのがわかる。粒はまったく揃(そろ)わない。やればやるほどずれて、焦(あせ)れさらさら音の波をつかまえられなくなった。時間ばかりがどんどん経(た)ち、嫌な汗をぐっしょりかいた。今まで習ってきたことも、店で毎日練習していることも、どこかへ飛んでしまった。

そのとき、胸のポケットに入れていた携帯が震えた。ピアノから離れ、表示を見る。柳さんだった。今最もかけてきてほしくない相手であり、最もかけてきてほしい相手でもあった。

「悪い。俺(おれ)だけだ。※指輪——」

「ありました」

間髪(まは)を入れずに答える。

「ああ、よかった。焦(あせ)った」

それから柳さんは、ん、と疑問形で言った。

「ん、どうした、外村。何かあったの」

※テレパスか、と思う。こちらの気配が伝わったのだろうか。観念(くわんねん)した。

「柳さん、すみません。明日の朝一で調律を一件入れていただきました。いんです」

気力を振り絞(しぼ)って、電話の向こうの柳さんに頭を下げた。

「佐倉さんのところ、今見ているんですが、触(ふ)ってかえってだめにしてしまいました」

柳さんは三秒ほど黙っていてから、わかった、と言った。

なさけなかった。それ以上に、申し訳なかった。どうしても今日弾きたくて僕を見つけて連れてきたのに、結局は僕がだめにしてしまった。ふたごに申し訳ない。今日はもう弾けない。柳さんにも申し訳ない。店にも申し訳ない。勝手に触って勝手にだめにして、明日調律をし直すとしても代金は取れないだろう。

「でも」

ふたごのひとりが言う。じつと黙って部屋の隅すみで見ている。たぶん、由仁だ。つかつかとピアノのそばに寄ってきた。

「この音、すごくいいでしょう」

ポーン、と弾いた基準のラの音は、僕の動揺とは遠く離れ、澄んでのびやかだった。

「それで、そこに合わせようとした、ほら、この音もいい」

ポロン、隣の鍵盤を叩く。ポロン、ポロン。その隣も。その隣も。

「生意気かもしれないけど、やろうとしてることを、すごくよくわかったんです。凜りんとした音でした。欲しかった音だ、って思いました。だから、うまくいかなくてもぜんぜん嫌な感じじゃなかった。C たぶん、もうちよつと、ほんのちよつとの何かなんだと思いません」

和音も口を開いた。

「私もそう思います。いくらうまくまとまってたって、全部冴さえない音に合わせられちゃったらがっかりだもの。D これくらい挑戦してる音、私も好きです」

挑戦か。僕は何に挑戦しようとしたのだろう。唇を嚙かむしかない。挑戦などしていない。ただの**B** 身の程知らずだった。

「申し訳なかったです」

頭を下げたとき、思いがけず涙が滲にじみそうになった。

「明日の朝、柳が——いつもの調律師が、来ます。ほんとうにすみませんでした」

「いいえ、無理に頼んだのはこっちですから」

もう一度謝ってから、部屋を出た。鞆がやけに重かった。ぜんぜんだめだ、と思った。※ 秋野さんのことをとやかく思うのは僕には百年早かった。

マンションを出て、駐車場へ向かう。白い軽が、ダッシュボードに指輪を載せて停とまっている。

夜になって、急激に気温が下がっていた。フロントガラスが曇る。のろのろと運転して、クラクションを何度も鳴らされながら帰った。

店に戻ると、一階のシャッターは下りているものの、二階にはまだ電気がついていていた。そう遅い時間ではないが、ピアノ教室が入っていない曜日には、六時半に店を閉めてしまう。人が残っていないかと思つた。

通用口から入って、二階へ上がる。二つ提げた鞆が重い。誰もいないことを期待してドアを開けると、今日に限って板鳥さんがいた。出先から戻ったばかりなのか、外出用のジャケットを着ている。E まともに顔を見ることができなかった。あんなに憧あこがれたのに。板鳥さんから学びたいことがたくさんあったはずだったのに。僕の技術は未熟などという域にさえ達していない。板鳥さんに教わるなど何ひとつないだろう。

「お疲れさまでした」

穏やかな声をかけられて、いえ、としか言えなかった。それ以上口を開くと気持ちたちが崩れてしまいそうだった。

「どうかしましたか」

「板鳥さん」

震えそうになる声を抑える。

「調律って、どうしたらうまくできるようになるんですか」

聞いてから、ばかな質問だと思った。うまくどころか、調律の基本さえできなかった。半年間は先輩について見て覚える。そういう決まりなのに、勝手に破つたのは自分だ。F もう少しのところまで

りかえって、亡き妻が冥界へ戻ってしまった※オルフェウスの神話を思い出した。ほんとうにもう少しだったんだらうか。近くにきて、きつとほんとうは果てしなく遠かったのだらうと思う。

「そうですね」

板鳥さんは考え込むような顔をしてみせたが、実際に考えていたのかどうかはわからない。板鳥さんのつくる音が、ふっと脳裏を掠めた。初めて聴いたピアノの音。僕はそれを求めてここへきた。あれから少しも近づいてはいない。もしかしたら、これからもずっと近づくことはできないのかもしれない。初めて、怖いと思った。鬱蒼とした森へ足を踏み入れてしまった怖さだった。

「いったいどうしたら」

僕が言いかけると、

「もしよかったら」

板鳥さんが※チューニングハンマーを差し出した。※チューニングピンを締めたり緩めたりするときを使うハンマーだ。

「これ、使ってみませんか」

差し出されたまま柄を握った。持ってみると、ずしりと重いのに手にひたつとなじんだ。

「お祝いです」

お祝いという言葉の意味を計りかねて、<sup>©</sup>怪訝そうな顔をしていったのだらう。

「ハンマーは要りませんか」

聞かれて、思わず、要ります、と答えていた。<sup>G</sup>森は深い。それでも引き返すつもりはないのだとはつきり気づいた。

「すぐく使いやすそうです」

「すぐく使いやすそうなのでなく、実はすぐく使いやすいのです。よかったらどうぞ。私からのお祝いです」

板鳥さんは穏やかに言った。

「何のお祝いですか」

こんな日に。記憶にある限り、僕の人生でいちばんだめだった日

に。

「なんとなく、外村くんの顔を見ていたらね。きつとここから始まるんですよ。お祝いしてもいいでしょう」

「ありがとうございます」

お札の語尾が震えた。板鳥さんは僕を励まそうとしてくれているのだ。森の入口に立った僕に、そこから歩いてくればいいと言ってくれているのだ。

( 宮下奈都 『羊と鋼と森』 一部改変 )

※(文中のことばの意味)

連弾：…一台のピアノを、二人で演奏すること。

指輪：…柳さんが彼女に渡すはずの、車に置き忘れられた指輪。

テレパス：…テレパシー能力を持った人。

秋野さん：…外村と同じ楽器店に勤務する先輩調律師。

オルフェウスの神話：…ギリシアの神話。毒蛇に噛まれ死んだ妻を、冥界(死の世界)から生き返らせるために交わした約束を守ることができず、妻との永遠の別れになったという神話。

チューニングハンマー：…調律師が使っている道具のこと。チューニングピンを回すのに使う。

チューニングピン：…ピアノ内部にある弦を張るために刺されたピンのこと。

問1 線①～④の文中における意味として最も適当なものを、あとの①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 10 12

① 「魔が差した」 10

- ① 自分の能力を過信してしまった
- ② 悪意に心が支配されてしまった
- ③ 誤った行動や判断をしてしまった
- ④ 自分の評価を上げようとしてしまった

② 「身の程知らず」 11

- ① 身体的に限界の程度がわからないこと
- ② 身の上に関わる重大さに気づかないこと
- ③ 相手に対する気遣いや配慮が足りないこと
- ④ 自分の立場や能力などをわきまえないこと

③ 「怪訝そう」 12

- ① 不思議そう
- ② 得意そう
- ③ 不服そう
- ④ 悲しそう

問2 線A「触るとしても、僕じゃない。柳さんだ」とありますが、このときの心情として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 13

- ① 見習いという立場と姉妹からの申し出との間で板挟みになり、柳さんならどう対応するだろうかと思案している。
- ② 姉妹が言うように気になるところは多少あったが、見習いの立場である自分が調律すべきではないと自覚している。
- ③ 予想もしなかった姉妹からの苦情を受けながらも、どうすることもできない自分の技術力のなさを悲観している。
- ④ 勝手な判断で調律することはできない立場だとわかっていながらも、自分の腕前を認めてもらいたいと葛藤している。

**問3**

——線B「微妙なずれだけを直せばいい。ふたごがもつと気持ちよくピアノを弾けるように」とありますが、次の(1)・(2)についてそれぞれ答えなさい。

(1) ここで用いられている表現技法を、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **14**

- ① 直喩    ② 隠喩    ③ 擬人法    ④ 倒置法

(2) ここから読み取れる心情として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **15**

- ① 姉妹の演奏で先ほど感じた音程のずれを再確認することができたので、自分の実力を発揮する場だと感じた。  
② 見習い期間であっても調律師であることには変わりないので、姉妹からの要望に精いっぱい応えようと考えた。  
③ 姉妹の演奏に感動しなにかしたいという気持ちから、微妙なずれなら自分でも調律できるはずだと考えた。  
④ 姉妹の演奏に心打たれたことは確かだが、その気持ちとは別に調律師としての使命感を強く感じた。

**問4**

——線C「たぶん、もうちよつと、ほんのちよつとの何かなんだと思います」、——線D「これくらい挑戦してる音、私も好きです」とありますが、これらの言葉から姉妹のどのような心情を読み取ることが出来ますか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は **16**

- ① 調律に失敗し気を落としている外村に対し、無理に依頼したことに責任を感じながらなんとか励まそうとしている。  
② 見習いであるとはいえ調律師であるにもかかわらず、多少の音程のずれさえも調律できなかった外村に落胆している。  
③ 時間とともに徐々に音程がずれていく状況を感じながら、やはり担当の柳さんに頼むべきだったと後悔している。  
④ 調律に悪戦苦闘する姿から外村の熱意は伝わるが、結果的にピアノの調律ができなかったことを残念がっている。

問5

——線E「まともに顔を見ることができなかった」とありますが、その理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 17

- ① 板鳥さんに認めてもらいたいと決まりを破ってまで調律したことで、かえって自分の技術が未熟だということを板鳥さんに知られる結果になってしまったと思ったから。
- ② 板鳥さんから教わった技術が通用するかを確かめたい一心で決まりを破り調律したことで、結果的に板鳥さんに失敗の言い訳をしなければならぬと思ったから。
- ③ 板鳥さんを目標に多くのことを学ぼうとしていたのに自ら決まりを破り調律した結果、その失敗によって多くの人に迷惑をかけてしまうことになると思ったから。
- ④ 板鳥さんの人柄と技術に憧れ一人前の調律師になりたいという焦りから決まりを破り調律した結果、その失敗が自分の進退に関わることになると思ったから。

問6

——線F「もう少しのところまでふりかえって、亡き妻が冥界へ戻ってしまったオルフェウスの神話を思い出した」とありますが、その理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 18

- ① 見習い期間の決まりを破ってまでも自分の技術を板鳥さんに認めてほしかったが、自業自得の結果として、退社することで詫びなければならぬと感じたから。
- ② もう少しで一人前の調律師になれると思っていたのに、今回の失敗で自分の技術のなさを痛感し、調律師を目指すことを諦めるべきだと感じたから。
- ③ もう少しで板鳥さんの調律の技術に到達するところだったのに、自分の失敗によって、これから指導を受けることができなくなってしまうと感じたから。
- ④ 見習い期間がもうすぐ終了するところであるにもかかわらず、自ら決まりを破ったため失敗し、これまでの努力がすべて無駄になってしまったように感じたから。

問7 ———線G「森は深い。それでも引き返すつもりはないのだとはつきり気づいた」とありますが、ここからどのような心情がうかがえますか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **19**

- ① 音楽の世界は森の中をさまようようなもので、それはまさに人生そのものだ。と今回の失敗でわかり、調律師を辞めても今後の人生に活かそうとする新たな気持ちがかがえる。
- ② ピアノの調律は森のように奥が深く、理想とする音にたどり着くにはまだまだ時間と技術が必要であるが、それでも理想の世界を追求しようとする強い気持ちがかがえる。
- ③ 調律師の仕事は到達点がない森のようなもので、いくら努力しても到達できないと悟りはしたが、いまさらどうすることもできないという荒々しい気持ちがかがえる。
- ④ 調律の依頼は森のように際限なく多様であり、すべての依頼に対応できる信頼が必要だということを知り、今後は人間性を高める努力をしたいという気持ちがかがえる。

問8 文中における「僕(外村)」の心情の変化として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **20**

- ① 焦燥 ↓ 自信喪失 ↓ 恐怖 ↓ 決意
- ② 不安 ↓ 優越感 ↓ 勇氣 ↓ 後悔
- ③ 期待 ↓ 親近感 ↓ 感謝 ↓ 満足
- ④ 嫌悪 ↓ 罪悪感 ↓ 尊敬 ↓ 安心

問9 この文章における表現と内容についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **21**

- ① 調律後のピアノの音を「ポロン、ポロン」と擬音語を用いることで、外村の調律が基本の域にすら達していないことを間接的に表現しようとしている。
- ② 「鞆がやけに重かった」、「二つ提げた鞆が重い」と、鞆の「重さ」を二度繰り返し表現することで、調律に失敗した外村の強い自責の念がかがいがい知れる。
- ③ 「白い軽が、ダッシュボードに指輪を載せて停まっていた」にみられる「指輪」に対する外村のまなざしから、先輩調律師の柳をうらやむ心情が読み取れる。
- ④ 外村に、突然「お祝いです」とチューニングハンマーをすすめる板鳥の言葉には、調律師を目指す外村の有望な将来性が込められている。

**第3問** 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある時、※獅子王、前後も知らず臥し<sup>あ</sup>まどろみける所に、ねずみあまた<sup>⑥</sup>さしつどひ、遊びたはぶれる程に、臥したる獅子王の上に、ねずみ一つ飛び上がりぬ。その時、獅子王目覚め驚き、このねずみを取つて引つさげ、すでに打ち砕かんとしけるが、獅子王、心に思ふやう、「<sup>A</sup>これ程の者どもを失ひければとて、いかほどの事のあるべきや」といひて、助けはべりき。ねずみ、命を<sup>I</sup>、「<sup>③</sup>さらに我ら、たくみける事にはべらず。あまりに遊びたはぶれる程に、まことの<sup>④</sup>けがにてはべる」と、かの獅子王を※礼拝して去りぬ。

その後、獅子王、ある所にて罨<sup>わな</sup>にかかり、<sup>B</sup>すでに難儀に及びける時、ねずみ、この由<sup>よじ</sup>を聞きて、急ぎ獅子王の前に馳<sup>は</sup>せ参り、「いかに獅子王、※聞こしめせ。いつぞや我らを助けたまふ<sup>II</sup>に、今また、助けはべらん」とて、かの罨<sup>はしほし</sup>の端々を食ひ切り、獅子王を救ひてけり。

そのごとく、※あやしのものなりとも、親しく※なつけはべらんに、※いかでか、その徳を得ざらん。ただ威勢あればとて、※凡<sup>ほんげ</sup>下の者を卑<sup>いや</sup>しむべからず。

(『伊曾保物語』)

※(文中のことばの意味)

獅子王：…百獣の王と呼ばれるライオン。

礼拝して：…お礼を言つて。

聞こしめせ：…お聞きください。

あやしのもの：…身分の低いもの。

なつけはべらんに：…手なずけますならば。

いかでか、その徳を得ざらん：…どうしてその恩恵を得ないことがあるうか、いや得るだろう。

凡下の者：…目下の者。

問1 線a～dの文中における意味として最も適当なものを、あとの①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 22 ～ 25

a 「まどろみける」 22

- ① ごろんところがつっていた
- ② 病気でよこになっていた
- ③ ちよつと目をとじていた
- ④ ぐっすりねむっていた

b 「さしつどひ」 23

- ① 力を合わせて
- ② 集まって
- ③ 話し合つて
- ④ 協力して

c 「さらに」 24

- ① とても
- ② それほど
- ③ まったく
- ④ なかなか

d 「けが」 25

- ① 悪行
- ② 負傷
- ③ 故意
- ④ 過失

問2 線A「これ程の者どもを失ひければとて、いかほどの事のあるべきや」の解釈として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 26

① この程度の者たちを殺したからといって、何の得になるだろうか。

② この程度の者たちを殺してはいないから、何の得になるだろうか。

③ この程度の者たちを殺したからといって、何の損になるだろうか。

④ この程度の者たちを殺してはいないから、何の損になるだろうか。

問3 I・IIに入る語として最も適当なものを、あとの①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号はIが 27・IIが 28

I ① 懸け ② 奪ひ  
③ 捨て ④ 拾ひ

II ① 御免 ② 御恩  
③ 御用 ④ 御所

問4 ———線B「すでに難儀に及びける時」の現代語訳として

最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 29

- ① すっかり危機的状況をのりこえられようとした時
- ② やっと危機的状況でなくなった時
- ③ もはや危機的状況になった時
- ④ とつくに危機的状況を脱することができた時

問5 本文で述べられている教訓として最も適当なものを、次の

①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 30

- ① 何の計画もなく行動していると、自分を見失うことになる  
かもしれないということ。
- ② 人のまねをする時には、いつも細心の注意を払わなければならないということ。
- ③ 力のない者を見下したりせず、むしろ優しくしなければならぬということ。
- ④ 他人のことに余計な口出しをすると、自分が痛い目にあう  
かもしれないということ。

これで問題は終わります。